

四章 たかすの殿様の城

― 鷺見城について ―

城とは

「城」という字は、「土」と「成^{なる}」という字で出来ているとおり、土で成り立っているのが本来です。平らな土地で、土を高く盛り上げるのは困難であることから、小高い山の頂上を削^{けず}つて平らにして作った、いわゆる「山城」(図1、後のページ参照)と言われたのが始まりです。鷺見城はまさに山城なのです。

それに対して、平地(平野)に作った城を「平城^{ひらしろ}」と言い、名古屋城や大阪城がこれにあたり、立派な「天守閣^{てんしゅかく}」を備えています。山城は小高い山の上なので、当初は見張り小屋(砦^{とりで})のような建物でしたが、戦争に備えて、攻められた時に立て籠^こもれるように建物も大きくなりました。

戦争の無い時は、山の麓^{ふもと}の館^{やかた}に住み、戦争になると砦(城)に登り、立て籠^こもって守ったのです。

山城の防^{ぼう}御^{ぎよ}(守り)の方法は、「土塁^{どるい}」、「堀切^{ほりきり}」、「堀割^{ほりわり}」、「堅^{たて}堀^{ぼり}」、「枿形門^{ますがたもん}」などがあります。

土 塁 Ⅱ土を盛り上げて築いた小さな壁(図1～4)

堀 切 Ⅱ尾根の地面を掘って切通した所(図1～4)

堀 割 Ⅱ主に山と山の低い部分を更に深く掘って水を通

した所(図1～4)

堅 堀 Ⅱ山の斜面の所々に下方向に長く切り込みを入れ

た所(図4) 篠脇城の堅堀群が有名です。

枿形門 Ⅱ城への入口が左右にジグザグで入りにくくした所(図3、4)

鷺見城の場所は

鷺見城は、向^{むかい}鷺^{さぎ}見^み地区にある高鷺振興事務所の南西、中之島公園の南側の長良川と切立川に囲まれた標高六四五mの小高い山頂にあり、自然の地形を利用して城の守りを固めています(図4、5)。

鷺見城の防^{ぼう}御^{ぎよ}は

鷺見城は山城であり、山頂の広い所には「本丸^{ほんまる}」(城の中心部)があり、その周辺には様々な防御施設(土塁、堀切、堀割、堅堀^{たてぼり}、枿形門)が残っています。

西側の少し低い平地には「西の丸」、東側の小高い山頂には「東の丸」と、それぞれ砦(見張り小屋)があります。東の丸を南に

下った所に「矢場」(弓矢の練習場)があり、また東の丸を東に下った所には「柳の馬場」(馬術の練習場)があります(図1、2)。参考の図を元に、実際に現地で確かめてみましょう。

向鷺見城から鷺見城へと名前が変わった

昭和五三年一月までは一般に向鷺見城と呼ばれていました。昭和三三年の春に、東海古城研究会代表の林春樹氏(故人)が、現地の城跡を詳しく調査され、その年の一月に「鷺見城」と名付けられました。

鷺見城は何時頃出来たのか

鷺見城が築かれた時期については、いくつかの説があります。年代順に考えてみましょう。

(一) 永暦元年(一一六〇)頃に築城した説
「濃北一覽」中「鷺狩り」の一説に次のとおり書いてあります。

『武蔵権守(藤原頼保)は雲ヶ岳(今の鷺ヶ岳)で大鷺二羽を討ちとり小鷺二羽を生け捕り、籠に入れて京都に持ち帰り天皇

に献上(さし上げる)したところ、天皇は大変お慶びになって、武蔵権守は家名として「鷺見」の姓を賜り、さらに美濃国芥見庄鷺見郷八ヶ村(鮎走村、切立村、正ヶ洞村、向鷺見村、中切村、穴洞村、西洞村、鷺見村)を末永く下賜された。其の後、武蔵権守は向鷺見村に城を築き、普請奉行(建築の担当者)は稲葉大膳が務めることとなる』

とあることから、武蔵権守が永暦元年から永万元年(一一六五)の頃に城を築いたものと思われます。

(二) 文治元年(一一八五)頃に築城した説
「鷺見家史蹟」(鷺見家の歴史上の出来事を記した書物)には、次のように書いてあります。

『文治元年(一一八五)に源頼朝が全国に守護・地頭を置くようになって、藤原頼保(鷺見頼保)は自ら鷺見郷を治める必要があつて武蔵権守に任せられ、幕府の御家人(鎌倉將軍家に仕える武士)として、その子重保と共に美濃国郡上郡鷺見郷に来たのである。同地の向鷺見に城を築いたのは、同じ年の文治元年である』

(三) 承久三年(一二二二)に築城した説
承久三年に起きた「承久の乱」(京都の朝廷と鎌倉幕府との争乱)

において、戦功を上げた東胤行が関東の下総国（千葉県）から山田郷（郡上市大和町）に所領を与えられ、山田郷剣村（大和町剣）に阿千葉城を築きました。

当時の鷺見氏は東氏と境を接しているので対抗の為、この時期に鷺見氏第三代鷺見家保が向鷺見村に鷺見城を築城したものであると思います。

（四）承久の乱の後、建長元年（一二四九）頃までに築城した説
東氏が阿千葉城を承久三年に築城して以来、東氏と鷺見氏とは何の争いもなく、互いに友好的な関係にあったが、東氏の勢力が段々強くなったので、対抗の為、建長元年の頃までに築城したと思われます。

この時期も鷺見氏第三代家保の時代です。

（五）建長五年（一二五三）に築城した説

古文書の「鷺見大鑑」には次のとおり書いてあります。

『元長三年（建長三年…一二五二）五月一二日美濃国あく田み庄（芥見荘）川西川東永代知行（川の西と川の東の地区を永く治めること）千六百二十拾三石下され、鷹見の御役料（役目に對する報酬）で向鷺見村お城御普請（建築）なされ、その時の御普請御見分（立ち会って指図する）の御役人を稲葉大膳に仰

せ付けられ、同五年（建長五年）八月三日にお城出来仕り候』

この時は鷺見氏第四代の保吉・諸保の時代であると思われます。

以上のように見てみると、（四）の承久三年（一二二二）から建長元年（一二四九）の頃までに築城した説と、（五）の建長五年（一二五三）の築城説の二説が最も有力であると思われます。

鷺見城での戦いはあったのか

最初に、「濃北一覽」の中に、「東家・鷺見家合戦の事」について次のように書いてあります。

『建武三年（一三三六）九月三〇日に東家は鷺見家を亡ぼさんとして、鷺見城へ向けて出陣し、切立山・鮎走山まで攻めて来たが、東家は大軍であり、鷺見家は小勢なので両家の話し合いにより、鷺見家が東家に人質を出すことで和睦した』
とありますが、当時の鷺見家・東家は共に一緒に美濃守護の土岐氏に従って郡上を出て、武儀郡・加茂郡・山県郡方面で戦っていますので、この鷺見城で戦争があったとは考えられません。

次に、二日町（白鳥町）城主の安藤盛胤（大和の篠脇城主・東常

縁の子）く別名・安東三郎は、鷺見郷の城主である鷺見禅峯の勢力が次第に衰え始めましたので、明徳三年（一三九二）及び応永七年（一四〇〇）と二度にわたって鷺見城へ攻めて来ましたが、禅峯は幕府に訴え、幕府は美濃国の守護に命じて安藤盛胤に止めるよう命じましたので、本当の戦争とまではいかなかったと思われる。

さらに、鷺見家史蹟に『天正三年（一五七五）に、金森五郎八入道（長近）が越前を攻撃したとき、鷺見城も一時陥落して保光は上野に逃げた』とありますが、長近は揖斐の方から大野に攻め入っているのです、鷺見城が攻撃されたのか定かではありません。

この時の鷺見城主は鷺見行保の孫の鷺見保光でした。ただ、天正一三年（一五八五）の飛騨攻めの時はこちらを通った可能性はあります。

四度目のことは「鷺見大鑑」に次のように書いてあります。

『八幡城の遠藤氏の家臣となつた鷺見忠左衛門は、慶長五年（一六〇〇）九月一日の八幡城の戦い（当時の城主稲葉貞通と前城主遠藤慶隆の戦い）で戦死した。これを聞いた鷺見城下の正ヶ洞村に同じ鷺見一族の餌取弾正と言う者が、鷺見城を乗っ取つ

た。鷺見城の下屋敷に居た留守役の松下五左衛門は、柳の丸の館において敵の油断に乗じて餌取弾正を撃つて城を回復した』とありますが、この戦いは五左衛門側には兵力なく、乗つとられるのをただ見ていただけの事で、戦いまでには至らなかったと思います。また、取り返したのも、弾正をうまく呼び出し油断したところを討ちとつたものであり、これも戦いではなかったのでしょう。

以上の様に鷺見城での戦いは本当にあつたかどうか、明確な記録は今のところ出ていません。

鷺見城の重要性について

（一）長期におよぶ鷺見一族の支配

築城が文治元年（一一八五）とすれば落城の慶長五年（一六〇〇）まで約四一五年間、また建長五年（一二五三）築城とすれば約三五〇年間という長期にわたって、鷺見一族が一つの城を領有し続けたのは、中世時代では全国的にもあまり例がないのです。その領有が出来た要因の一つには、鷺見郷が大日ヶ岳、鷺ヶ岳に、さらに飛騨の高山に囲まれ、主要な入口には強大な白山長滝神社・長瀧寺があり、容易に攻めては来られない状況にあつたためと思います。

(二) 郡上市の文化財に指定されている

高鷲村（郡上市合併前）は、この城跡が村ゆかりの鷲見一族の居城であり、周辺の景観も良いことから昭和三〇年に村（現在は郡上市）の文化財に指定しました。

しかし学術的調査は行っていないため、高鷲村は東海古城研究会代表で岐阜県文化財保護協会の林春樹さんに依頼し、昭和五三年の春から同年一月まで測量調査などを実施、その結果、ほぼ全容がわかったため報告書とともに平面図や配置図、実測図を作成しました。

(三) 鷲見城は近世（江戸時代）の城のルーツです

鷲見城は長良川と切立川に挟まれた典型的な山城で、山頂の本丸を中心に東丸、西の丸と矢場や馬場などが築かれています。このうち特に注目すべきは、本丸入口の大手門で、東丸から四〇メートルの間に外敵の侵入を防ぐため、掘割と土塁が三重に張り巡らされており、さらに大手門には、定説だと近世以降の技術といわれている枡形門が施されています。

この枡形門は、敵が中央突破できないようにと出入口は門に向かって右横に設け、中央と左横は土塁を積み上げたものです。

林春樹さんは次のように述べられています。

『中世の城で枡形門のある城はほとんど例がなく、近世の城、すなわち江戸城や名古屋城などのおそらくルーツだろう』

さらに

『建物は長い風雪で跡かたもないが、土塁や石垣も少し残っており、当時の城の姿を十二分にとどめている。規模的には近世以降の城よりはるかに小さいが、中世の城としてはA級の城で、学術的価値も高い』
と評されています。

(四) 今後の鷲見城および周辺の保存・整備について

本丸の発掘調査（入口の枡形門を含む）の実施
本丸・西の丸を含む周辺山林の郡上市での買収
立木の伐採
大手門の再現
大手道が一部崩落のため改修
柳の馬場、馬術観覧場の整備
馬場近くの馬小屋跡、館跡の整備
各種説明板、案内板の設置
などが必要と考えます。

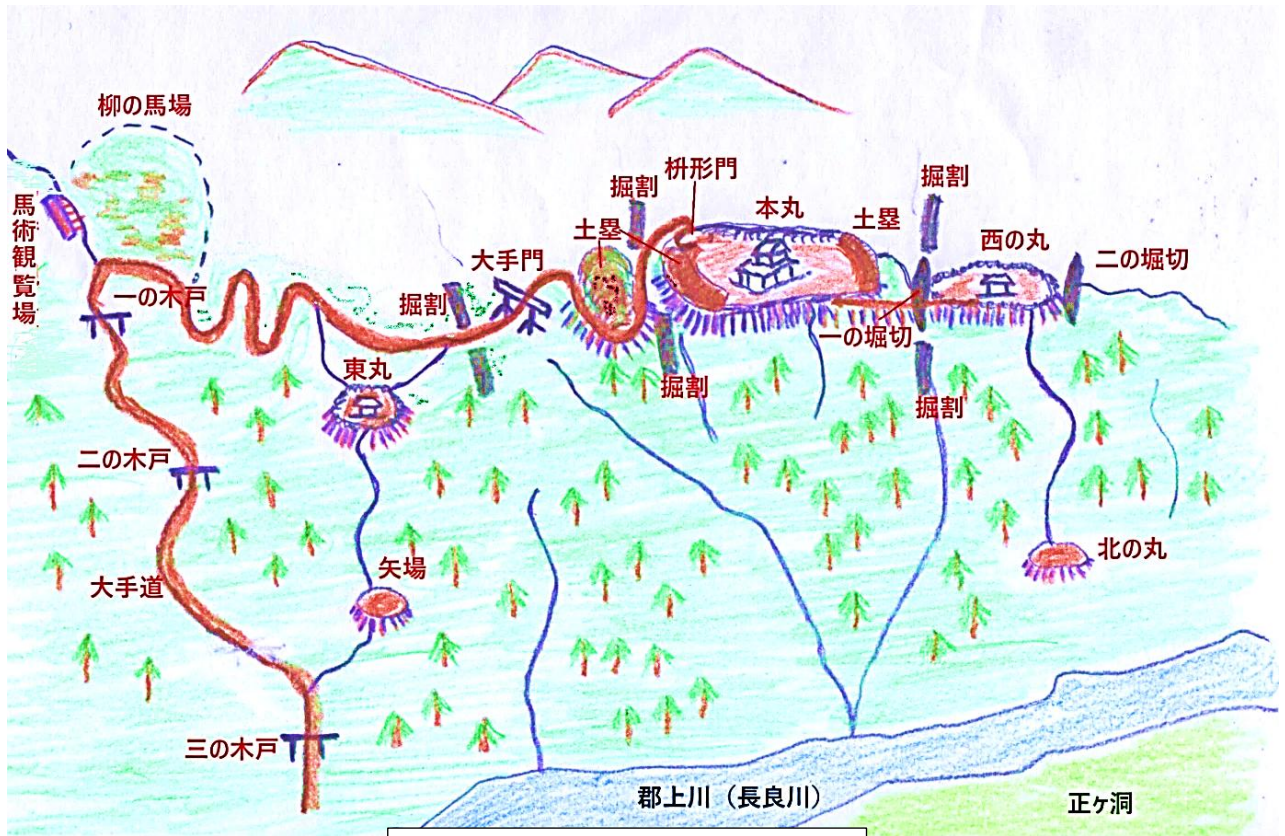


図1 鷲見城の構造



図2 鷲見城概要図 昭和53年11月林春樹氏作成

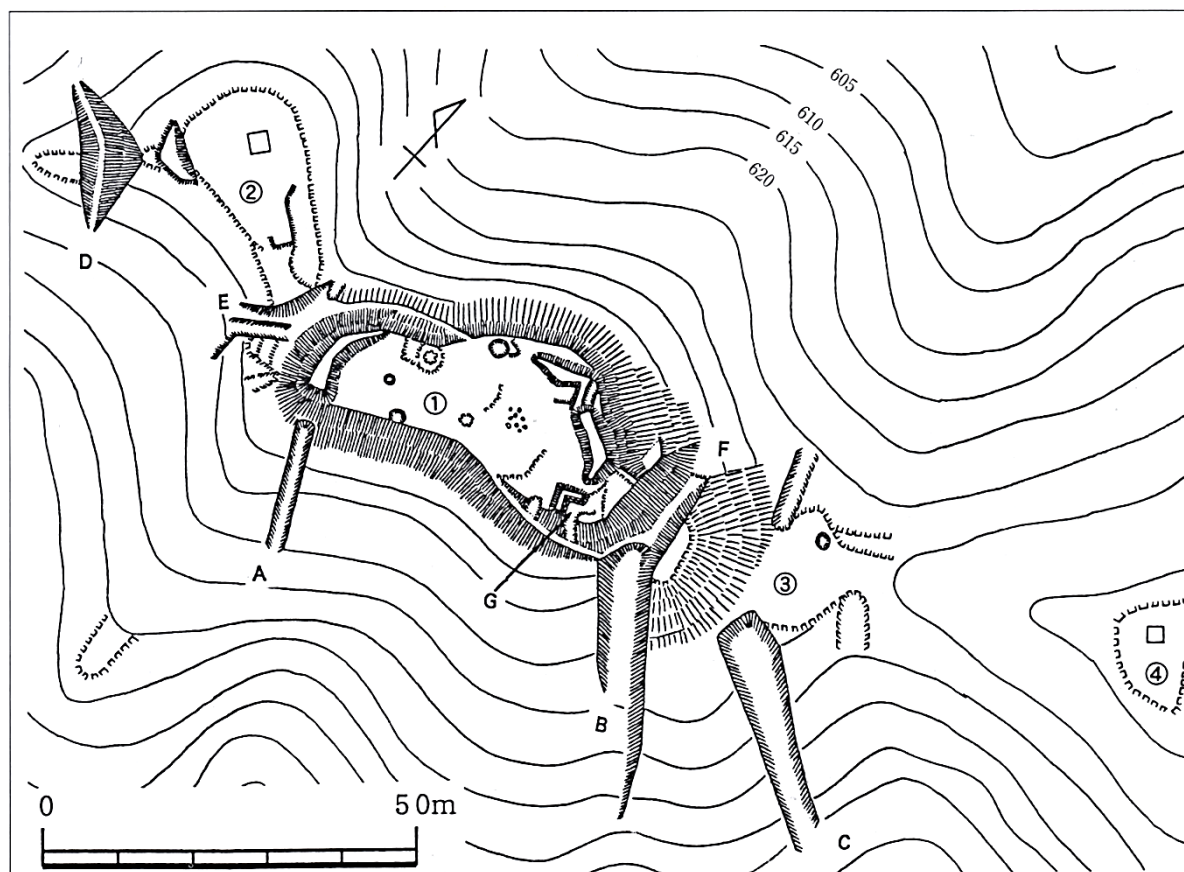
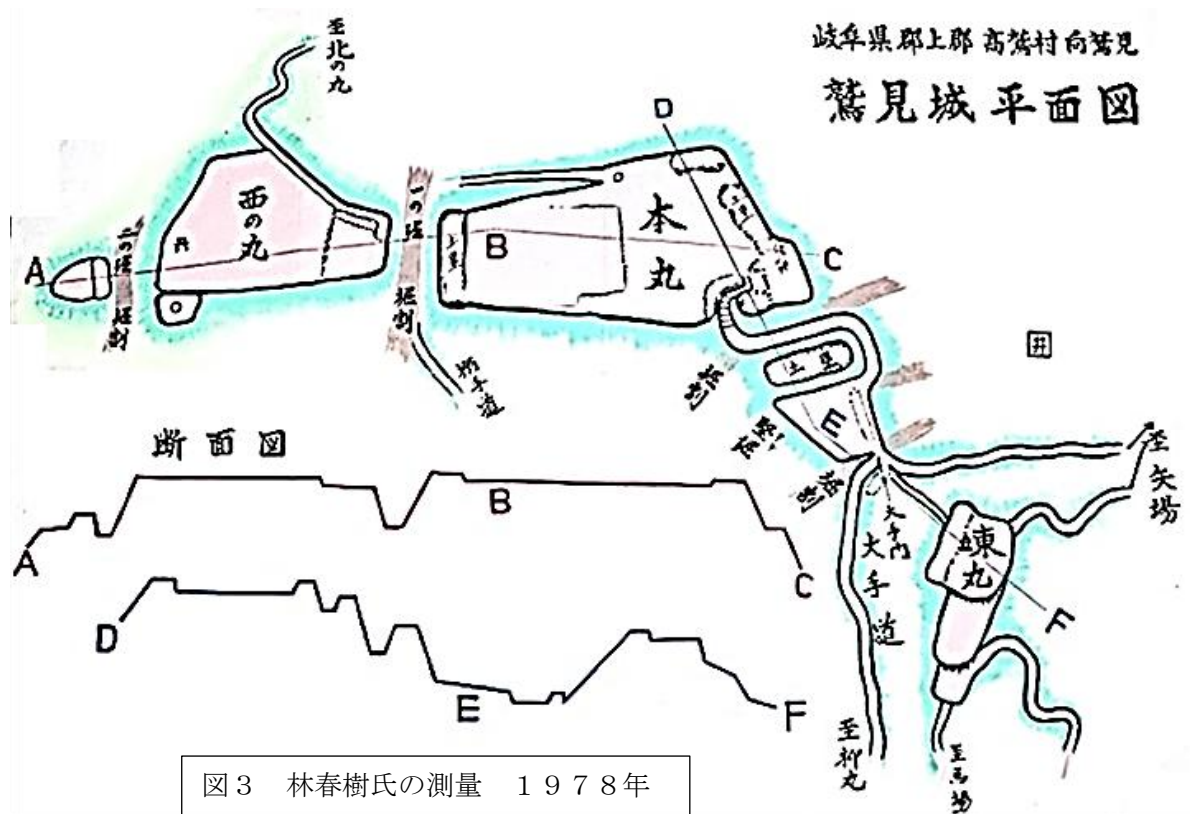


図4 「岐阜県中世城館跡総合調査報告書第二集」鷺見城略測図 佐伯氏2003年作図
曲輪:主郭①と②③④ 堀切:A,B,C 堀切:D,E,F 内枳形虎口:G



図5 鷲見城近辺の赤色立体図。中央の山の頂上に平になった所が鷲見城で、「堀切」が良くわかります。城の北側の道は新しい道です。茶屋ヶ巾と植松は削り取られて道になりました。